

## ドイツ現代小説研究

遠 山 義 孝

## Studie über einige deutsche Romane und Novellen der Gegenwart

TOYAMA Yoshitaka

Unter dem oben genannten Forschungsthema las ich hauptsächlich Romane und Novellen, die 1999~2001 in Deutschland erschienen sind. Ich legte Wert auf die Lektüre der Romane junger Schriftsteller, deren Namen und Werke ich skizzenhaft angebe. Dabei sei zu erwähnen, dass es gerade in diesem Zeitraum die Verleihung des Nobelpreises für Literatur an Günter Grass (1999) gab. Es war eine frohe Nachricht für die deutsche Gegenwartsliteratur.

Die hier erwähnten Schriftsteller gehören zur Enkelgeneration von Günter Grass. Benjamin Lebert (Jahrgang 1982) debütierte mit „Crazy“ (1999). In diesem autobiographischen Roman erzählt der sechzehnjährige Benjamin Lebert mit erstaunlicher Wärme, großem Witz und einer guten Portion Selbstironie von der Schwierigkeit des Erwachsenwerdens. Das Buch wurde sofort ein Bestseller, 180000 Exemplare wurden verkauft. Jenny Erpenbeck (Jg. 1967) schrieb eine Parabel: „Geschichte vom alten Kind“ (1999).

Thomas Brussig (Jg. 1965) ist inzwischen auch in Japan bekannt durch sein Werk „Helden wie wir“. Karen Duve (Jg. 1961)s „Regenroman“ (1999) ist in einer unkomplizierten Sprache abgefasst. Das sorgt für Geschwindigkeit und erzählt die Handlung spannend und kurzweilig. Dann las ich Katrin Askans „Aus dem Schneider“ (2000). Die Autorin Katrin Askan wurde 1966 in Ostberlin geboren, später floh sie in den Westen. Das ist das Thema ihrer späteren Veröffentlichungen. Judith, die Hauptperson des Romans, trägt stark autobiografische Züge.

Aber die großen Dichter sind in Deutschland immer noch vorherrschend und dominierend. Günter Grass zum Beispiel erzählt in seiner Novelle „Im Krebsgang“ von der Tragödie der Versenkung des Flüchtlingsschiffs „Wilhelm Gustloff“ 1945. Grass schildert mit Erfolg einen von der deutschen Literatur lange gemiedenen Stoff, nämlich die blutige Geschichte der Flucht aus dem Osten. Auch Martin Walser ist produktiv. Er schrieb seinen sechzehnten Roman „Der Lebenslauf der Liebe“, von dem ich in diesem Forschungsbericht ausführlich vortragen will.

In dem Roman „Der Lebenslauf der Liebe“ ist zum ersten Mal bei Walser eine Frau die Hauptperson geworden. Susi Gern heißt sie. Sie liebt, heiratet und merkt, dass sie ihren Mann entweder ganz oder gar nicht will. Da ihr Mann dafür nicht geeignet ist, hört sie auf, seine Frau zu sein. Aber zur Trennung reicht die Ernüchterung nicht aus. Es beginnt die Suche nach einem, den sie ganz haben kann. Das wird der Lebenslauf der Liebe. Ihr Mann ist zuerst sehr reich, dann ruiniert, dann krank, dann tot. Susi hat eine durch keine Erfahrung belehrbare Sehnsucht nach reiner, d.h. vollkommener,

gegenseitiger Liebe. Die Unbelehrbarkeit ihres Gefühls ist ihre Kraft, eine jeden Ruhms würdige Lebenskraft. Und der Roman rühmt Susi Gern. Sie war vorher durch die Lebensumstände eine Abenteuerin der Liebe, wird am Schluss zur reinen liebenden Frau. Susi läßt sich durch keine noch so elende Erfahrung zur Ermäßigung ihres Anspruchs auf Glück zwingen. „Ihr Vater hätte sie doch nicht in eine Welt gesetzt, in der man nicht glücklich werden kann.“ Susi Gern kann nicht aufhören zu lieben. Sie erlebt kraß genug, dass dieses zu genau so viel Schmerz wie Lust führt. Was sie als Lebensstimmung erreicht, nennt sie ihr Unglücksglück. Die Abenteuer und Sensationen dieser Heldin, das gelebte Leben, werden vorgeführt wie eine Serie von Photographien, was manchmal schockierend wirkt. Der Roman umfasst über 500 Seiten, die Lektüre erschöpfte.

## 《個人研究》

## ドイツ現代小説研究

遠 山 義 孝

## I

研究課題「ドイツ現代小説研究」のもとに、ここ数年の間に出版されたドイツ語圏の小説を渉猟してみたが、成果報告にあたり、まず初めに読了した小説群を若手作家を中心に列挙してみたい。近年の現代ドイツ文学界での一大事件ともいえるべきものは、ギュンター・グラス（Günter Grass）のノーベル文学賞（1999年度）の受賞であった。処女作『ブリキの太鼓』（1959）以来、彼の名が毎年候補に挙がっていただけに、ようやく今になっての感があるが、それだけに明るいニュースとなった。グラスへの授賞が、ドイツ文学に新たな推進力を付与したことは明らかである。徐々にその影響が現れ、すでにグラスの文学上の孫ともいえる若い作家たちも誕生している。デビュー作『クレージー』（Crazy）が18万部も売れて話題になったベンヤミン・レーベルト（Benjamin Lebert）はまだ19歳の若さである（年齢は2001年現在のもの、以下の作家も同様）。今後有望視される作家は30代が中心で、例えばイエニー・エルペンベック（Jenny Erpenbeck）は34歳、永遠の子供時代に関する寓話ともいえるべき作品『大人びた子供の話』（Geschichte vom alten Kind）で頭角を現した。現在35歳のトーマス・ブルッシヒ（Thomas Brussig）は『俺たちのような英雄』（Helden wie wir, 1995）で、消えゆくDDR（旧東ドイツ）への鎮魂歌を奏でた。この作品は東西ドイツ統一後書かれた初の「統一」をテーマにした小説である。大胆な性描写はグラスのデビュー当時を彷彿とさせる。DDRで成長したブルッシヒであるが、DDR時代の検閲制度の下ではこのような作品は書けなかったことであろう。この作品はすぐに映画化され話題を呼んだ。女性作家の活躍もめざましく、エルペンベックと並んでエルケ・ナータース（Elke Naters）とカーレン・ドゥーヴェ（Karen Duve）の名が挙げられよう。ナータース（38歳）は、1999年秋『嘘』（Lügen）を発表、処女作『女王たち』（Königinnen）同様、女性心理を描いて文体の簡潔さが特徴的である。ドゥーヴェ（40歳）の『雨小説』（Regenroman）は、ドイツ東部の湖沼地帯に朽ちた家を買った若い男女が、打ち続く長雨のためにエロチックな狂乱におちいる物語である。トーマス・レーア（Thomas Lehr）は43歳であるが、『ナボコフの猫』（Nabokovs Katze）によって将来を期待されている。カトリン・アスカン（Katrin Askan）の『30歳を超えて』（Aus dem Schneider）も見逃せない。彼女は東ベルリン生まれで西側に逃亡した経験を作品化しており、マルティン・ヴァルザーの『幼児期の復権』（Die Verteidigung der Kindheit）

にも一脈通じるものがある。独訳が2000年に刊行された村上春樹の『国境の南，太陽の西』（Eine gefährliche Geliebte）も、大きな反響を呼んだ。ドイツの作家新世代は第二次大戦の負の遺産をになった戦後文学の世代、特に「グループ47」の作家群、ハインリヒ・ベル、ギュンター・グラス、マルティン・ヴァルザー、ジークフリート・レンツ等々、と違って、過去と偏見なく対峙している。若い作家たちには、過去の克服という困難な絆から解放された感がある。戦後50年以上を経てドイツの犯罪に対する記憶がもはや筆をにぶらせることがなくなったのであろうか。この他、ラファエル・ゼーリヒマンの『ミルクマン』<sup>1)</sup>、マルティン・ヴァルザーの『愛の履歴書』<sup>2)</sup>、それに本成果報告直前に刊行されたグラスの『蟹の歩み』<sup>3)</sup>の3篇が特に特に印象に残った。このうち、紙数の関係で本報告ではヴァルザーの『愛の履歴書』1編のみをとりあげ詳しく論じたいと思う。

## II

『愛の履歴書』は、章付けはなされていないが、本文全体525頁は3部に分かたれている〔Inhalt: Sonntagskind S. 7 Glücksrad S. 199 Strangers in the night S. 359〕。テーマは錯綜しており、一言で表現することは難しいが、共通因数的なキーワードとして愛と老いを挙げることができよう。富豪の生活環境、崩壊する愛、転落、幸福の追求、純粋な愛、外国人問題等々がそれらに複雑にからみ合っている。愛の現象学という見方も可能である。かつてのヴァルザーの作品に通底していた様な普通の市井の民の物語ではない。一挙にミリオネアー（百万長者）の世界に飛躍する。ドイツの新富裕階層における愛と結婚の生態アナトミーが、ヴァルザーの手で巧みになされていく。そこでは『フィンク氏の戦い』（Finks Krieg, 1996）にみられたような作者の鋭い社会批判的な視点は見られず、淡々と最近のドイツ社会の情景描写が続く。文体は短い単文の連なりを主体とした並列文体（Parataxe）が中心で、複合文（Hypotaxe）はあまり見当たらない。初期の作品では、むしろヒュボタクセが中心であったから、長い創作活動の過程で文体も変化してきたのである。ただしヴァルザーに特徴的な饒舌体（Suada-Redestrom）の文体は変わっていないし、また引用符（Anführungszeichen）の使用もなされていない。直接話法においても使われておらず、この点は首尾一貫している。

『愛の履歴書』の主人公ズーシ・ゲルン（Susi Gern）は女性で、男性の主人公が一般のヴァルザーの小説の中では珍しい。女性の主人公は『みんなバラバラ』（Ohne einander, 1993）に次いでこれが2作目である。しかし後者では、3章のうち最初の2章が女性の主人公、最後の第3章が男性が主人公であったから、全編女性が主人公の小説としては、実質上これが初めてである。主人公の姓ゲルン（Gern）は、『愛の彼岸』（Jenseits der Liebe 1976）のホルン（Horn）以来、ハルム（Halm）、ツュールン（Zürn）、ドルン（Dorn）、フィンク（Fink）と、ヴァルザーが意識して命名してきた一音節の名前である。これによってコンパクトな文体を音声上でも加速させる意図が働いていると思われる。

小説の舞台（Ort）は、デュッセルドルフである。彼の小説の殆どが、生まれ故郷のボーデン湖畔ヴァッサーブルクを中心とした南ドイツを舞台にしているが、この作品にデュッセルドルフを選んだのは、女主人公のモデルの存在との関連もあるだろうが、やはり現在のドイツで新興富裕階層のミリオ

ネーアの住環境を扱うのにそこがもっともふさわしいからであろう。東京の銀座にあたるような、ケー（Kö）と呼ばれる高級専門店の並ぶケーニヒスアレー（Königsallee）が、リッチな気分を盛り上げる役目を果たす。主要登場人物はズージの他には夫であるエドムント（Edmund Gern）、彼らの息子アンドレアス（Andreas Gern）、そして娘のコニー（Conny Gern）である。ズージは心のやさしい、しかしあまり賢いとはいえない女である。教育程度はあまり高くないのであろう。文中単語のスペルをよく間違える女として出てくる。家族の中で彼女と一番緊密な関係にあるのがコニーで、少し知的な障害がある。この親娘の関係は全編を通して変わることがない。物語で直接に扱われる期間は1987年から1999年で、ミレニアムを迎える1999年の大晦日で終わっている。

### III

ドイツには Autorenlesung といって、作家が自作を聴衆の前で朗読するパフォーマンスが広く行われているが、マルティン・ヴァルザーは、特に自作の朗読に重きを置く作家として知られている。彼は1年の大半を自作の朗読のための旅回りにあてているほどである。若いときに演劇畑を目指したこともあるだけに、ただ読むだけという種のものではなく、感情移入が実に巧みで身振り手振りを交えてのヴァルザーの公演は見ものである。彼は Lesung の効果をも考慮に入れて執筆しているので、読者にも声を出して読むことを勧める。したがって翻訳をしてしまうとドイツ語の響きが伝わらなくなるうらみがある。唯一ヴァルザーの小説で邦訳されている『逃げる馬』（Ein fliehendes Pferd, 1978）が、ミドライフ・クライシスを扱ってドイツでは類をみない大ベストセラーになったにもかかわらず、日本ではほとんど売れなかったといわれる。それもこのことと大いに関連があると思う。したがって本小説を解釈するに際しては、朗読もできるようドイツ語の原文を掲げて論を進めていきたいと思う。

第1部の Sonntagsskind（日曜日生まれの子）では、ゾンタークスキントが幸運に恵まれるという俗信を物質的な栄華の比喩にして、ズージとエドムントの結婚生活の日常が提示される。ズージはエドムントを愛し、結婚し、そして夫の不貞に気づく。夫は売れっ子の弁護士（Meisteranwalt）で、主として多くの会社の顧問をしながら、同時に株の仲買人として世界各地を股にかけ、投機によって莫大な利益を得ている。苦学して一代で富を築きあげた新興ミリオネアの典型といえよう。ズージは、夫のおかげで物質的には何不自由ない暮らしをしている。デュッセルドルフの高級住宅街にあるマンション最上階の390平方メートルのペントハウスに居住し、ミース・ファン・デア・ローエの製作した家具類に囲まれての生活である。洋服筆箱は12を数え、グッチのドレスやハンドバッグ、バリーの靴で埋まる（Konsumismus als Religion）。そこに毛並みのいい純血種の3匹の猫たち（Domino, Jeannie und Timmi）が加わり、朝食を猫と一緒にとるのが彼女の楽しみでもある。車はピンク色のボルシェに乗り、ケーニヒスアレーに出かけては、毛皮（ミンク）のコートなどを衝動買いしたりする。それも一度に2着という有様である。宝石類にも糸目をつけない。ズージは死ぬときには、ピンクのボルシェと一緒に埋葬してもらいたいという望みをもっている。夫はズージに対抗

してか、愛用車は最高級車のベントリーである。彼らはその上家政婦や掃除婦を3人も雇っていて、それは庶民にはとても想像もつかない富の世界である。部屋にはアンディ・ウォーホルが彼らのために描いた2枚の肖像画が飾られている。しかし外面の華やかさにもかかわらず、彼らの結婚生活はすでに破綻している。夫は妻に隠すことなく平気で不貞を働く。彼女はエドムントが女たちのところに行くのをやめてくれるよう切に願った。が、いずれも暖簾に腕押しであった。そこでブージは彼の妻であることをやめる決意をする。とはいうものの、贅沢な暮らしに慣れたために、彼女にもいくばくかの逡巡が生じ、別れるほどには決心がつかねた。それに何よりもエドムントが頑として離婚を承諾しないのである。„Mord ja, Scheidung nie.“（「殺されるのはいいが、離婚はいや」）というのが彼の口癖であった。結局心の中で、ブージは離婚はしないがエドムントとはベッドをともしないと宣言する。こうして結婚地獄（Ehehölle）は妥協の中で進行する。ひとは本来お互いに適合しないものである。ひとは意識して適合するのである（Man paßt eigentlich nicht zueinander. Man macht sich passend.<sup>4)</sup>）。

貧乏であれ、金持ちであれ、汝を適合させよ、そうすればもう汝はそれにふさわしいものになる。所詮誰も人生から逃れることはできないのだからとブージは考える。これは一方ではブージ・ゲルンの根本的な誤り（それはあらゆる大きな誤りと同様、真理も含んでいるのであるが）であり、他方、この教訓の意味する内容は奇妙な道徳ともいえよう。というのは、ブージが真に望むのはすべてを自分のものにすることのできる男だからである。エドムントは全部欲するにはふさわしくなかったもので、ブージは彼の妻であることをやめた。それは彼に以後自分の肌を触られることの拒否を意味していた。その結婚生活は、小説のこの時点でも、もう30年以上も続いているのである。離婚を許さない夫は、妻にお互いに何事も隠し事をしないようにしよう（Alles ist erlaubt, aber nicht hinterm Rücken des anderen<sup>5)</sup>）と提案し、自分の愛人について得意げに語ったりする。彼女の方も今や負けてはいない。すべてを自分の所有にすることのできる男を探し求めて男から男への恋の冒険行を始める。夫も妻も次第に両者公認の愛人をもつ身となり、その生活に違和感を覚えなくなる。エドムントはイタリアのミラノやフランスのパリへの出張には愛人同伴を常とした。それも行先ごとに別の女を連れていくのである。整頓好きなブージ（Frau Gern, ein Genie der Ordnung und Gerechtigkeit<sup>6)</sup>）は、その際エドムントのために愛人に恥ずかしくないようスーツケースに下着類をきちんと折りたたんで詰めてやる配慮も見せるのである。ブージ・ゲルンも長い結婚生活の間になんども挫折しながら愛することをやめることができなくなる（Endlos lieben und scheitern）。彼女はそれらの恋愛を几帳面にパソコンに記録、保存していくのであるが、愛が快樂と同じくらい苦痛を伴うことを身をもって体験する。パソコンのファイルに収まったデータ、つまり恋の遍歴が書名のいわれでもある「愛の履歴書」となるのである。愛用するパソコンにはレオナルドという愛称までつけてある。

Susi hatte Lust auf Bilanz. Bevor sie heute die neue Annonce aufgeben würde, wollte sie Zahlen vor sich haben, die ihr auf einen Blick ihr Lieben und Leben überschaubar machten. Und ließ die Dateien kommen: 1962 bis 1965: Salim. 1965 bis 1968: Shankar. 1968 bis 1972: Lofti. 1974 bis

1977 Dirk Pfeil. Dann, bis 1985: Annoncenmänner. Das ist die Bilanz von ihrem einunddreißigsten bis zu ihrem vierundfünfzigsten Lebensjahr. Salim im Lokal kennengelernt. Shankar auf der Straße eingefangen. Lofti war Kellner in Shankars Bar in der Oststraße. Die Annoncenmänner, außer Dirk Pfeil, Episoden, Grotesken, Lächerlichkeit, Katastrophen.<sup>7)</sup>

ブージはバランスシートを見るのが好きだった。今日も新聞に新しい広告を出す前に、彼女は一瞥のもとに自分の愛と性が概観できる数字を目の前に出してみたかった。そしてパソコンを起動して、中からデータを取り出した。1962年から1965年までザリム。1965年から1968年までシャンカール。1968年から1972年までロフティ。1974年から1977年までディルク・プファイル。その後、1985年まで広告の男たち。これが彼女の31歳から54歳までのバランスシートである。ザリムとは酒場で知り合った。シャンカールは往来でつかまえた。ロフティはオストシュトラッセにあるシャンカールのバーのボーイだった。ディルク・プファイル以外の広告の男たちの名前、エピソード、グロテスクな事柄、滑稽なこと、破局が記録されていた。

作者は、ブージの恋愛遍歴を要領よく読者の前に提示してくれる。彼女が1931年生まれであることも、この記述から知れる仕組みである。ヴァルザーは1927年生まれであるから、主人公の年齢は彼の実年齢に近い。ところで新聞に交際広告や結婚広告を出すことはドイツでは珍しいことではない。いわゆる高級紙にも「交際を求む」欄が存在する。ちなみに男も女も、自分を美男美女に見立てた広告をだすので、読んでいて思わず微笑を誘われる。女性はスリム (schlank) であることをうたい文句にするが、「目いっぱいやせた」 (vollschlank) という造語は、ふとった女性の自己表現として生まれたものといわれている。

#### IV

第2部 Glücksrade (幸運の輪) は、序破急の破の部分にあたる。コニーの言い回しによれば „Et kütt, wie et kütt“ (Es kommt, wie es kommt) である。コニーは方言や自分で考え出したことばを繰り返し繰り返し喋ったりする癖があるが、ブージやその周りの者にはその意味がわかる。この表現も「なるようになるさ」で、第1部で一見順調そうに見えたゲルン一家の変調を予測させる。彼女の表現には楽天的なトーンがあるが、それは彼女の性向のなせるわざかも知れない。むしろ、なるようにならない悲劇性が際立つ章でもある。ブージやエドムント、アンドレアスやコニーにそれぞれの試練が待ち受け、起承転結でいえば転の部分ともいえよう。ここではヴァルザーの多くの作品に共通する Niedergang (没落) が中心テーマである。エドムントは、バブル経済に浮かれ、朝起きがけに一本の電話で500万マルク (DM 5000000) [=約3億円] の株の取引をするなど、それまでの経済的成功を糧に思い上がりの危険な投機である仕手戦に出たりする。それがどのような結果をもたらすかは、章の後半部分になるまでわからない。

セックスに憑かれたエドムント („Rudelbumser“ „Sextrapper“) は、3人の継続的な愛人の他に、



## ドイツ現代小説研究

どこかで見つけてきた女を家に連れ込んだり、あまつさえ娼家にも出入りする。そのような不倫行為が、もういい加減やめてくれといたいほど繰り返される。彼の妻であることをやめたズージではあるが、肉体関係は無くなったものの、しかしまだ愛とかそれらしきものは残っていた。気立ての優しいズージにも我慢の限界があり、あまりの乱行に時には詰問するのであるが、エドムントは、„Soll ich deshalb meinen Schwanz abschneiden“（「それじゃあ、わしにペニスを切り落とせとでもいうのか」）と聞き直す有様である。以下はそれらの一場面である。

Als sie gesehen hatte, wie Edmund auf der Französin lag und sie hinausgerannt war auf den kleinen Balkon in der Heinrichstraße, hatte sich in ihr der über ihr Leben entscheidende Satz gebildet: Ich will einen Mann für mich oder keinen. Aber die Schere hatte sie nicht in den Sessel gerammt, als sie aus dem Schlafzimmer auf den Balkon gerannt war. Dazu hätte sie in all ihrem Schmerzschock doch gar nicht die Zeit gehabt, nicht die Nerven. Das mit der Schere hat sie erst gemacht, als herausgekommen war, daß er der Englischlehrerin siebzigtausend für eine Wohnung gegeben hatte. Da hatte sie etwas ruinieren wollen. Und ihr war nichts Besseres eingefallen, als die Schere in die Sessellehne zu rammen.<sup>8)</sup>

エドムントがフランス女の上に乗っておよんでいるのを見たとき、彼女はただもうびっくりしてハインリヒシュトラッセの住まいの小さなバルコニーに飛び出したのであるが、そのとき、彼女の中に彼女の生涯を決定する「私は私のために、私のことがすべてであるとする一人の男を欲する、そうでなければいっさい男はいらない」という指針が生まれたのであった。しかし彼女は、寝室からバルコニーに駆け出したとき、鋏をソファに突き立てなかった。胸を突き刺すようなショックのあまり、彼女にはまったくその余裕がなかったし、その神経も持ち合わせていなかったのである。鋏で突き刺すのは、彼が英語の女性教師に70000マルクのマンションを買い与えたことがわかったとき、初めて実行した。そのとき彼女は何かを減茶苦茶にしたかった。彼女にはソファの肘掛に鋏を突き立てることよりいいアイデアは浮かばなかった。

大声で泣きわめきながら、高価な家具の破壊によって怒りを静めるズージ。彼女は病的飢餓（Bulimie）にもなり、大食しては吐き続ける。その上アルコールにもひたる。ヴァルザーはすでに過去の諸作品でドイツの小市民階層の心理を見事に描ききったが、それは今回の新興富裕階層の環境、つまりデュッセルドルフのハイソサイエティーでも成功している。ごくふつうの存在物や平均的な存在に対する視線の鋭さは、現代ドイツ作家の中でも際だっている。日常のかわり映えのしないドラマをヴァルザーのように冷酷に無慈悲に叙述することのできる作家は殆どいないのではなからうか。主人公ズージはそのドラマの中で愛や生存の妨げをするまったく厭わしい紐にからみとられてしまうのである。彼女は、無邪気で愚直な、本を読まない（„Sie selbst hatte noch nie einen ganzen Roman gelesen“）女であって、この点ではむしろ女性解放の反対像ですらある。

『愛の履歴書』は1990年代のドイツを描いて、それはとりもなおさず統一後のドイツが舞台なので

あるが、イデオロギーの時代が過ぎ去って総じて頼る規範の喪失した社会が対象である。ブージーがその社会で直面する日常の中の強制に焦点が当てられ、老いゆく女性が現実と直面する諸問題との邂逅に紙幅がさかれ、それらがヴァルザーによって細密画のような厳密さで執拗に追求される。1990年代というのは、ちょうどブージーの60歳代にあたる年代であり、彼女はできることなら素通りしたい「老、病、死」というものと身近に対決しなければならないのである。

それでも、障害のあるコニーのお気に入りの TV 番組グリュックスラート (Glücksrad) を親娘一緒に見る和やかな場面も登場する。コニーはクイズが得意で毎週この放送を見ることを欠かさない。彼女が正答を当てるとエドムントも喜んで父親の感情を素直に表現する。Glücksrad は、遊具の一種で回転式抽選器のことであるが、ここでは「幸運の女神」(Fortuna) の意でもあり、ヴァルザーはコニーの上にそれを重ねているものと思われる。コニーの兄のアンドレアスは、第1部では殆ど目立たない存在であった。ユーゴスラヴィア人の妻クセニヤ (Xenia) とは別居中で離婚係争中でもある。彼らの娘クサンドラ (Xandra) はブージーになつき、しばしば彼女のもとを訪れるのでブージーは彼女を通して息子や嫁の様子を知る。クサンドラはブージーが大好きで、それは望みの物をなんでも買ってもらえるからでもあるが、ブージーにはどんなことでも気兼ねなく話することができる。そこには孫と祖母の交流が情愛に満ちあふれ、クサンドラの存在が、読者に「女」であるはずのブージーが実は「おばあさん」でもあるという側面をも知らせてくれる。

転機はエドムントの投機の失敗から始まる。自信過剰が信用取引の投機のたびに裏目に出て損に損を重ね、彼は最終的には800万マルクの負債をかかえ破産する。彼の築きあげた金融帝国は瓦解の道をたどり、数多の不動産は差し押さえられ、裁判所の執行官 (Gerichtsvollzieher) が顔を出すようになる。豪華なペントハウスも引き払わざるを得なくなる。これと平行してエドムントの身体にも異変が生じる。軽度の痴呆状態の出現がそれであり、自分自身の現在の居場所がわからなくなって、タクシーで家まで送られてきたり、その際タクシーの座席を汚し、賠償金を請求されたりもする。最初は下着を濡らす程度であるが、前立腺肥大とパーキンソン病の進行とともに、エドムントは自分で処置することができなくなり、汚れた下着を床に脱ぎっぱなしにする。ブージーは家政婦に気づかれぬようその後始末をしなければならない。介護に直面する老いゆく女ブージー。エドムントはそのような状態にあっても、愛人のところに行くことをやめない。いつも彼が女のところに行くときには、その前に歯をみがいて出かけるので、ブージーにはすぐにそれとわかる。60歳代後半の病身の男に果たしてこのような性的行為が可能であろうか。あるいはヴァルザー一流の風刺であろうか。エドムントはクリスマスの夜にもポルノビデオ (ソフトポルノ) を見て過ごす。テレビ画面では音なしのポルノが流れていた。会話のあるポルノ映画がソフトポルノで、会話なしでそのものずばりの映像の連続をハードポルノ区別するらしい。とにかくエドムントの性に憑かれた (sexbesessen) 姿は変わらない。最後には大便も登場する。ブージーは毎日夫の汚れたオムツや、ぐっしょり濡れたパンツの後片付けに直面する。なんとも暗くてやるせない。愛猫がまき散らす糞にはまだ余裕をもって対応できる。しかし夫の大便となると話は別である。失禁し、よだれをたらす憐れな老人になったエドムント。今やブージーとエドムントの力関係は逆転してしまう。ところが執念と言ったらいいだろうか、彼はオムツ

## ドイツ現代小説研究

をあてながらも愛人のところに出かけていく始末である。エドムントの落とすフケ、小便、大便が日常生活の光景として読者の目の前に突き出される。思わず目をふさぎたくなるような修羅場の連続である。

債権者が押しかけるようになると、広大なマンションの強制競売も決まり、彼らは下町の60平方メートルの小さなアパートに引っ越さざるをえなくなる。その直前にエドムントは入院中の病院で死ぬ。ブージは、「解放された」(Entkommen<sup>9)</sup>)と思った。42年間の結婚生活であった。故人は死亡記事がその名声のゆえに有力紙FAZ(フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG)に掲載されることを望んでいた。しかし破産した実業家は冷たくあしらわれ、こんどはブージの新聞社に対する戦いが始まる。最終的には無料で掲載させることに彼女は成功するが、それは最も小さな死亡広告であった。しかし彼女はそれによって夫との絆を確認できたと思うのである。

## V

第3部 Strangers in the night は、エドムント亡き後のブージの老いるの恋の章である。この章が『愛の履歴書』の中心になる章で、第1部、第2部のすべての問題がここに収斂し、最終的に昇華される。夫亡き後の家族の周辺にも様々な変化が起こる。エドムントの死の少し前には、精神的に病んでいたアンドレアスの前妻クセーニヤが、デュッセルドルフのオーバーカッセル橋からライン河に投身自殺を遂げた。高等遊民のアンドレアスはいくつかの仕事に失敗したあと、風俗店などの経営にたずさわり、その上資金問題から追われる身となって、元売春婦の新妻と南アメリカに逃亡してしまう。ブージのもとにとどまったのは、コニーだけであった。ブージはミリオネアー夫人から、病気の夫の介護を経て無一物の未亡人となった。42年間の結婚生活の後でブージは最底辺の生活を味わうことになる。すべての財産と何の心配事もない快適な生活はもはや存在しない。天国から地獄への変化、あまりの落差に読者は痛みすら感じる。コニーと一緒に新たに引越したアパートでも、ブージは債権者につきまといわれ、社会福祉事務所からは、彼女が生活保護の受給者に値するかどうかひそかに監視がつく。が、彼女は逆境になっても少しもひるまない。分散して隠してあった富の名残りの品々を蚤の市に出したり、うさんくさい画商たちに絵を売ったりして生活資金を稼ぐのである。この境遇になって全編を通して基調トーンとなっている Unglücksglück(不幸という幸福)というキーワードが登場する。Unglücksglück は本来 Oxymoron(撞着語法)であるが、生き様の気分(Lebensstimmung)として彼女が到達するところのものを指す表現として使われる。彼女は、どんなにきめな経験に遭おうとも、幸福への要求を軽減させようとはしない、あくまでも幸福を追求するという態度である。これは画家であり教師であった彼女の父アナトール・ファーレンホルトが残してくれた人生訓でもあった。

Ihr Lebensgrundgefühl: Anspruch auf Glück. Anatol Fahrenhold hätte sie doch nie in eine Welt gesetzt, in der es ein Unglück war zu leben. Wenn die Welt ihr den Anspruch auf Glück ver-

weigert, wird sie aus persönlicher Stärke ihr Unglück zu ihrem Glück machen. Unglücksglück. Nicht zum ersten Mal formulierte sich das in ihr so.<sup>10)</sup>

彼女の人生の基本感情は、幸福の追求である。アナトール・ファーレンホルトは、生きることが不幸であるような世界に彼女を生んだわけではなかった。もしも世界が彼女に幸福の追求を拒否するなら、彼女は自分自身の強さから不幸を幸福に変えることであろう。不幸という幸福。このことが彼女の内でそのように定式化されたのは初めてのことでなかった。

ブージの恋心 (Liebeslust) は未亡人になっても相変わらず尽きることがない。突然カリル (Khalil) とのふってわいたような老いらくの恋がテーマとなる。これが晩年の幸福となるかどうか。第3部ではフランク・シナトラのヒット曲 *Strangers in the night* が多くの場面で聞こえてくる。Stranger in the night としてのカリル。カリルは「見知らぬ人」として迎えられるのである。彼はもともとコニーのボーイフレンドで、デュッセルドルフでコンピュータ工学を学ぶアフリカのモロッコからの留学生である。ブージの娘コニーは背が低く、縦幅と横幅が同じくらいの超肥満児で、母には、もうすぐ40歳になるというのに男が見つからないといって嘆く。少し知的障害のある娘が初めてその若者を部屋に連れてきた時、ブージは、彼は金が目当てだと言った。ところがどうだろう。ブージは、結果的にコニーのこのボーイフレンドを奪ってしまうのである。

こうして68歳の女と30歳の男の恋物語が始まるのであるが、まず二人の年齢差が38もあるというのがふつうでない。カリル・アルガート (Khalil Algat) は1969年生まれ、ブージ・ゲルンは、既述のように、1931年生まれである。彼らを待ち受ける試練の厳しさは容易に想像がつく。彼女は生活保護費の支給を受けている。つまり彼女の貧乏は今や役所にも知られている。一方、カリルの父は手紙で、もしも息子がドイツの女と結婚すれば毎月の仕送り1000マルクは打ち切りだと警告してくる。ブージにはコニーの説得も必要である。

Schon bevor sie die Wohnungstür öffnete, hörte sie Strangers in the night. An Connys Tür das Schild BITTE NICHT STÖREN. Auf dem kleinen weißen Tischchen ein Blatt, darauf in mehreren Farben: Jetzt sind wir Rivalen, Mutter. Sie klopfte laut, ging hinein, ohne eine Antwort abzuwarten. Zuerst stellte sie Sinatra ab. Mäusken, sagte sie, mir tut alles weh, innen und außen. Und erzählte ihr, was passiert war. Besonders ausführlich wurde sie, als sie schilderte, wie sie unter dem schlafenden Khalil gelegen hatte, eingezwängt und rundum geschunden.<sup>11)</sup>

彼女は住まいのドアを開ける前にすでに、「ストレンジャーズ・イン・ザ・ナイト」を聞いた。コニーのドアには「邪魔しないで」の札が掛かっていた。白色の小机の上には、「ママ、わたしたち、今はライバルよ」と複数の色で書かれた紙が置かれていた。彼女は強くノックし、返事を待たないで、中に入った。彼女はまずシナトラの歌のスイッチを切った。モイスケン、私は内も外もみんな痛いよ、と彼女は言った。そして彼女に何が起こったかを話して聞かせた。彼女が、眠っているカリルの下になったときのこと、それから押し込まれそしてぐるりと動きまわっ

た様子を語ったとき、特に詳細をきわめた。

内側が痛いというのは、もちろん精神的な内面の痛みの吐露でもあろう。ズージは私たちにとって一番いいのはこの形よと、いささか強引な形でコニーを納得させる。カリルはイスラム教徒で、ズージはキリスト教徒、68歳と30歳、親子以上に違う年齢差である。ズージには何よりも自分が高齢であるとの自覚がある。

Sie wußte, wenn sie irgendeine Schwäche oder Kränklichkeit zeigte, irgend etwas, was von nichts als von ihren achtundsechzig Jahren kommen konnte, dann hatte sie ihn verloren. Ohne Geschlechtsverkehr konnte sie Khalil nicht halten..... Susi hatte von Anfang an gefunden, die Welt sei eher schrecklich. Die einzige Ausnahme: Das Geschlechtsleben.<sup>12)</sup>

彼女は、もしも彼女がなにかある弱味や虚弱さを見せたなら、つまり彼女の68歳という年齢だけからくるなにかあるものを見せたなら、その場合、彼女は彼を失ってしまうことを知っていた。彼女は性交なしにはカリルをつなぎとめることができなかった。……ズージは最初からこの世界はむしろ恐ろしいものと思っていた。唯一の例外は、性生活である。

探し求めていた男は、ズージが財産を失い、夫を失い、いわば無一物になってから現れた。彼女は経験によっては習得できない、純粹で完全な、つまり両者の側からの愛への憧れの中で生きてきたのである。ズージが以前はその境遇によって恋の冒険者であったとするなら、彼女はここに至って純粹に愛する女になったといえよう。彼らの結婚に対する障害物には、年齢差だけではなく、その他に外国人問題も加わる。カリルの滞在許可の延長の時期と彼らの結婚の時期が重なり、偽装結婚の疑惑がかけられたりするが、ズージは最後の幸福を失わないために役所と徹底的に戦い勝利を収める。そして彼らは結婚したのであった。その代償として、カリルの仕送り1000マルクは打ち切れ、ズージの1021マルクの寡婦年金も消失した。ところで、ヨーロッパでは2002年の1月1日より、共通通貨ユーロ（Euro）の流通が始まったため、従前の各国通貨はすべて消滅した。したがってドイツの通貨DM（デーマルク）も現在は使われていない。そのため『愛の履歴書』は、マルクが使用されていた時代の最後の小説としても記憶されることであろう。

今回の結婚生活もズージにとっては平坦なものではない。カリルは敬虔なイスラム教徒でしばしば祈禱集会に出かけて家をあける。ズージはその間不安な気持ちで彼の帰宅を待ち続ける。結婚指輪がはめられているかどうか彼女にはいつも気にかかる点である。老いに抗して美容整形外科にも顔を出し手術の相談などもする。これも Unglücksglück のもつ一側面である。

Ihr Leben, diese Ehe ist das reine Unglücksglück. Und wenn das auch immer schon so war in ihrem Leben, dann war es doch noch nie so. Sie hat jetzt keine Scheu, sich die glücklichste Frau der Welt zu nennen, wenn mehr mitgedacht als ausgesprochen wird, daß sie auch die unglück-

lichste Frau der Welt ist.<sup>13)</sup>

彼女の生、この結婚は純粋な Unglücksglück（不幸という幸福）である。そしてもしもそれがまた彼女の生活においていつでもそうであったなら、それはまだしかしそうではなかったのだ。もしも彼女がまた世界で最も不幸な女であると言葉に出さずに、頭の中で考える場合、彼女は今やばばかりことなく世界で最も幸福な女であるというだろう。

このくだりは、パラドックスな内容をはらむ難解な箇所である。彼女の感情の度し難さは彼女の強さでもあり、ひとつの活力になっている。決められた良妻賢母型の枠の中で生きるのではなく、素直に自分の感情にしたがって生きる。『愛の履歴書』は、その点でテオドーア・フォンターネの『エフィー・ブリースト』の Gegenentwurf（対照作品）ともいえるのではなからうか。ズージの愛の履歴を振り返ると、自分の Leben のために愛したかったのだということがわかる。Gern という名前とも無関係ではない。ズージは長い年月にわたって多数の愛人と関係し、その後は新聞広告によって一時的な愛を求めてきた。

愛は同時に憧れであり、痛みでもある。最高に到達可能なものは不幸という幸福である。これもまた Unglücksglück の一面であろう。愛することをやめることができなかった女ズージの最後の拠点になったカリルは、頻繁に家を留守にしても彼女を愛している。そこに救いがある。ラマダンも知らなかったズージであるが、後には彼の宗教心にも理解を示すようになった。最後はミレニアムのシルヴェスター（1999年12月31日）の夜である。除夜の鐘が打つ前にカリルが帰ってくる。コニーの表現にならえば、「相変わらずうまくいった」（„Et hätt noch jootjejange“=Es ist noch immer gut gegangen）ということになる。ズージとコニー、この母と娘の関係はこの小説の中で最も純粋で美しい愛のモメントといえよう。抱擁する二人に向かって、私たちはいつまでも一緒よとコニーが言うとき、そこには陰の主演としてのコニーの存在感がただよう。読者は以下の小説の最後の文によってカタルシスに導かれ安堵するのである。

Conny sagte zu ihnen herauf: Ich liebe euch beide. Jetzt lösten beide ihre Münder voneinander, ohne ihre Arme voneinander zu lassen, und sagten beide zugleich zu Conny hin: Und wir erst dich.<sup>14)</sup>

コニーは彼らを見上げて言った。「二人とも愛しているわ」。二人は腕は離さないまま、唇だけを離し、そして同時にコニーに向かって言った。「私たち（俺たち）の方こそよ」。

『愛の履歴書』に対する書評は否定的なものがほとんどで、好意的なものはごく少数派であった。積極的に評価したのは、ジクリト・レフラーくらいである。女性解放の旗手としても有名なこの批評家は、ヴァルザーは女性が何を望んでいるかを知っていると語り、「ズージ・ゲルンはマルティン・ヴァルザーのエマ・ボヴァリーである」（„Susi Gern ist Martin Walsers Emma Bovary“<sup>15)</sup>）と激賞する。ズージは勇敢な強い女であるという解釈である。レフラーによれば、68歳の男が30歳の女と結

## ドイツ現代小説研究

婚しても誰も別に文句はいわないのに、逆の場合だとなぜひとは嫌悪感をいだくのか、そこに彼女は相変わらずの男性中心主義をみてとるのである。いずれにせよ、『愛の履歴書』は過激な小説である。Unglücksglück を理解し、全編を読み通すにはかなりの忍耐力を要する。500頁を超える分量もさることながら、日常生活の瑣末性の繰り返しにうんざりし、風刺と挑発の中に作家自身の老いをも感じ、読了後ある種の疲労感を覚える。イロニーの心理療法を得意とするマルティン・ヴァルザーの狙いも実はそこにあったのかもしれない。

## 注

- 1) Seligmann, Rafael: Der Milchmann. Roman. Deutscher Taschenbuch Verlag, München. 1999. 332 Seiten.
- 2) Walser, Martin: Der Lebenslauf der Liebe. Roman. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. 2001. 525 Seiten.
- 3) Grass, Günter: Im Krebsgang. Eine Novelle. Steidl Verlag, Göttingen. 2002. 216 Seiten.
- 4) Walser, Martin: a.a.O., S.75
- 5) Walser, Martin: a.a.O., S.16
- 6) Walser, Martin: a.a.O., S.15
- 7) Walser, Martin: a.a.O., S.139 f.
- 8) Walser, Martin: a.a.O., S.367
- 9) Walser, Martin: a.a.O., S.343
- 10) Walser, Martin: a.a.O., S.503
- 11) Walser, Martin: a.a.O., S.407
- 12) Walser, Martin: a.a.O., S.441 f.
- 13) Walser, Martin: a.a.O., S.451
- 14) Walser, Martin: a.a.O., S.525
- 14) Walser, Martin: a.a.O., S.442
- 15) Löffler, Sigrid: Es gibt kein Glück ohne Unglück. In: Literaturen. Das Journal für Bücher und Themen. 9/2001. S.63

(とおやま・よしたか 理工学部教授)